

5. 結果

大人と1対1では緊張しやすい子どもも、親子で参加するとリラックスし、低年齢の子どもほどグループの中で、すんなりと話す様子も観察されました。

また、子どもからは「自分と同じような子がいてびっくりした」「楽しかった」「また遊びに行きたい」などの感想が聞かれました。



～親子教室の中での子どもの様子～

- 選ぶ
- 挙手する
- 保護者に耳打ちする
- みんなの前に出る
- みんなの中から一人ずつ参加する
- みんながいる空間で保護者と話す
- 参加者の輪の中で順番に注目する 等

○保護者の感想

保護者からは親子教室で「家以外の場所でスムーズに話すのを初めて見た」「～をして驚いた」と、子どもの行動に対する驚きの感想をいただきました。親子教室でやったことを家で再現したり、家族に説明したりする様子も聞かれました。

座談会では「他の保護者の話に共感できることが多かった」等の感想が多く、回数を重ねると、次第に「全体的に積極的になってきた」「幼稚園の全体発表に自分から参加したいと言った」等の子どもの変化を喜ぶ声も聞かれるようになりました。

6. 考察

これまでの研究では、大人との1対1での個別セッションを週1回の頻度で学齢期に行うことが一般的でした。今回の試行を通して、グループを月1回、就学前に行い、より低い頻度や年齢であっても、子どもや保護者に変化が見られるという新しい知見を得ることができました。

今回の試行から、就学前の段階で早期に場面緘黙症に気付き、親子が安心して自分を出せる“居場所づくり”が、その後の二次障がい予防という観点からも重要と考えられます。

7. まとめ

場面緘黙症はあまり知られておらず、子どもが在籍する保育園や幼稚園の先生も関わった経験がないことから、保護者はインターネットや本でしか情報を得られず、孤立しやすいです。こうした同じ悩みを持つ保護者同士が、グループセラピーを通して深く共感し合えることで、専門家のカウンセリングでは得られない「ピアカウンセリング」という効果が生まれます。当事者が一人で悩むのではなく、仲間と繋がる場所を提供することも地域の療育センターの役割だと考えています。

また、場面緘黙症の専門的研究や相談機関は少ないため、当センターのような療育センターが早期発見・相談の場所として、そして正しい情報提供をする機関として役割を担う必要があるとも感じています。

今後も様々なニーズに応えられるよう、従来の視点や対応方法に工夫を加え、臨機応変な支援を心がけたいと思います。

※場面緘黙症は、「かんもくネット」という非営利団体が情報発信等を行っています。

